

別15

21

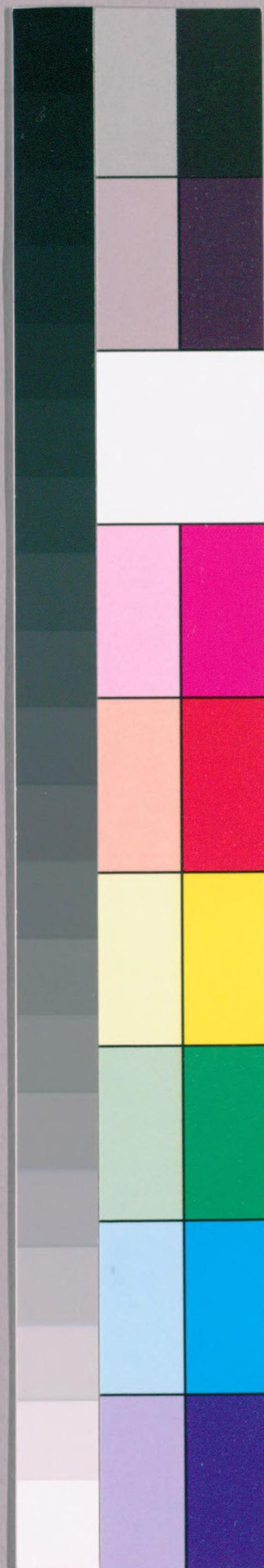
第百二十号

別冊改曆并ハ令般御改曆ノ御趣意
 を了解シ多クハ必用ノ物トモ實ニ人間
 有益ノ書籍トモ官安村町ニ迄郵送
 須布ニモ条熟續テ改曆事
 右爰内ニ至減取達ナラ者也

明治六年
 一月三十日

滋賀縣令松田道之

35

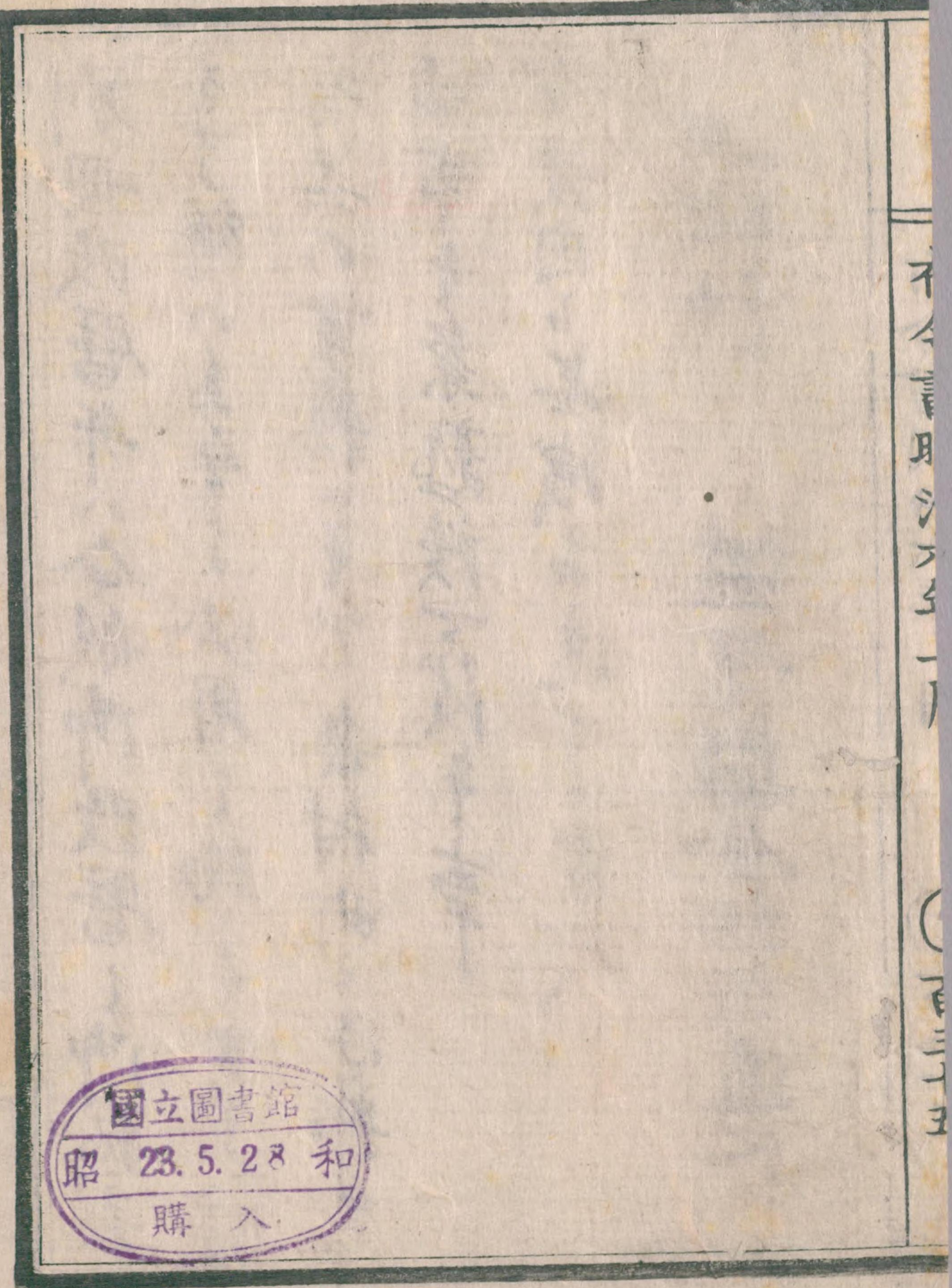


明治六年一月一日發兌



福澤諭吉著
改曆辨

慶應義塾蔵版



国立図書館
昭 23. 5. 28 和
購入



国立国会図書館 タイトル『改曆辨』 請求記号 本別15-21

ガラス使用



改曆辨

大陽曆と大陰曆との辨別

福澤諭吉 著

此度大陰曆を止て大陽曆とす明治五年十二月三日を明治六年一月一日と定めたるハ一年俄小二十七日の相違ふて在間又此を怪む者も多からんと思ひ西洋の書を調べて彼の國へ行そる大陽曆と古來支那日本等小用る大陰曆との相違を示すこと左の如し

明治六年一月一日

大陽曆



大陽とハ日輪のことあり大陰とハ月のことあり
日曆とハ此よそのことなり故ハ大陽曆とハ日
輪を本小一と立たることあり大陰曆とハ月を本
小一と立たることあり云ふ義なり抑も此世界
ハ地球と唱へ圓きものにて自分舞ひめぐり
日輪の周圍を廻ることあり譬へバ獨樂の舞
ひめぐり九行燈の周圍を廻るが如く獨樂の自
転一度廻るハ即ち地球の自轉といふもの
て行燈の方より向たる半面ハ晝となり裏の半面

ハ夜とあり去の一轉を一晝夜と見るなり斯く
獨樂の舞ひめぐり行燈の周圍を廻るハ即ち地
球の公轉と云ふものにて行燈を一廻よりて
本の場所へ歸る間ハ春夏秋冬の時候を變へ一
年を爲すあり故日輪の周圍ハ地球の廻る道ハ
六億の里數なりこの六億里の道程を三百六十
五日と六時実ハ五時四十八分先ツ六時トスルナリ
の間ハ一廻して本の處へ歸るなり即ち地球の
自轉より云へバ三百六十五度と四半分轉る間

三



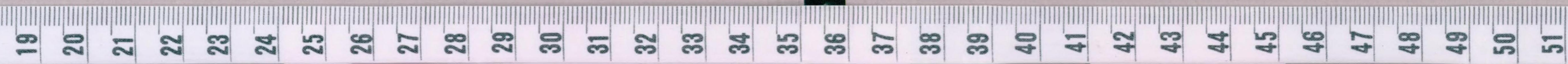
小六億里の道を走ることなり大陽暦のこの勘
 定を本小一して日輪の周圍小地球の一廻する間
 と一年と定めたるものなり然る小此一廻の間
 丁度三百六十五日なり千年も万年も同ト暦
 小て差支ふき答なきも六十五日の上端は六
 時といふものなりて毎年六時づつ後を四年目
 小ハ四六二十四時即ち一日の後となりて四
 年目小ハ一日増して其間小地球を走らぬ丁
 度本の夏小行甘を待つなり即ち是閏年なり右の

如大陽暦小日輪と地球とを照合せて其互
 小釣合ふ處を以て一年の日數を定たるもの也
 春夏秋冬寒暖の差毎年異なりことなる何月
 何日といふは丁度去年の其日と同ト時候小て
 種を時く小も霜を折る小も懸る暦を出して蘇
 を見る小及も去年の彼岸より三月の二十一日
 今年の彼岸より丁度其日なり且毎年の日
 數同様なりゆゑ一年と定めて約条したる事ハ
 丁度一年の日數小て閏月の為に一箇月の損徳



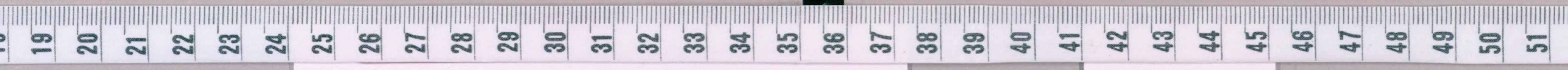
何ることもなく其外の便利の計へ及
 びざるまじかり唯此後ハ所謂晦日
 小月を見ること何れも一
 目を驚かすの不便なり人乎文盲
 人の不便ハ氣の毒ふが如く顧る
 小暇はくも其便不便ハ暫く
 附る角小日輪ハ本有りの月ハ
 附るの事柄ハ附るの當ふせむし
 て本不由て曆を立るハ事柄ハ
 於て正しき道といふべし
 大陰曆ハ月を目當ふし定たる
 曆の法有りの月

ハ此地味の周囲を廻るもの
 日と八時小て一廻り
 の釣合小して丁度一廻り
 十九日と十三時かり大陰曆ハ
 毎月十五日の夜小圓き月を
 見る趣向なきとも右の二十九
 日と十三時を十二合せて十二
 箇月としてハ三百六十五日
 不足らむ即ち月ハ既十二度
 地球の周圍を廻るたきとも
 地球ハ一日日輪の周圍を
 一廻りせざるなり此差九二年
 半余小して一月計



なるゆゑ其時小至り閏月を置き十二月を一年
とふし地球の進で本の鬼小行付を待たり又こ
をを譬へばつらよ一三百六十五文拂ふべき借
金を毎月二十九文五かづの濟口ふて十二箇
月拂へば一年小九十一文づの不足は十一
文づ二年半余をも滞らば大抵三十文計りの
引負となりべし閏月ハ即ちこの三十文の引負
を一月小よとめて拂ふこと知りべし右の次
弟小て大陰曆ハ春夏秋冬の節小拍らば一年の

日數を定るものふれば去年の何月何日と今年
の其日とハ唯唱のと同様なりども四季の節ハ
必相違せり故小入梅土用彼岸ふとて農業
の節ハ一々曆を見ざき巴叶をぬあとふま
且又これよでの曆小ハつらぬ吉凶を記し黒
日の白日のつて訳も己かたぬ日柄を定たきバ
丑間小曆の廣く引る不ど迷の種を多く増し或
ハ婚禮の日限を延し或ハ轉宅の時を縮め或ハ
旅立の日小後きて河止小逢ふもつら或ハ暑中

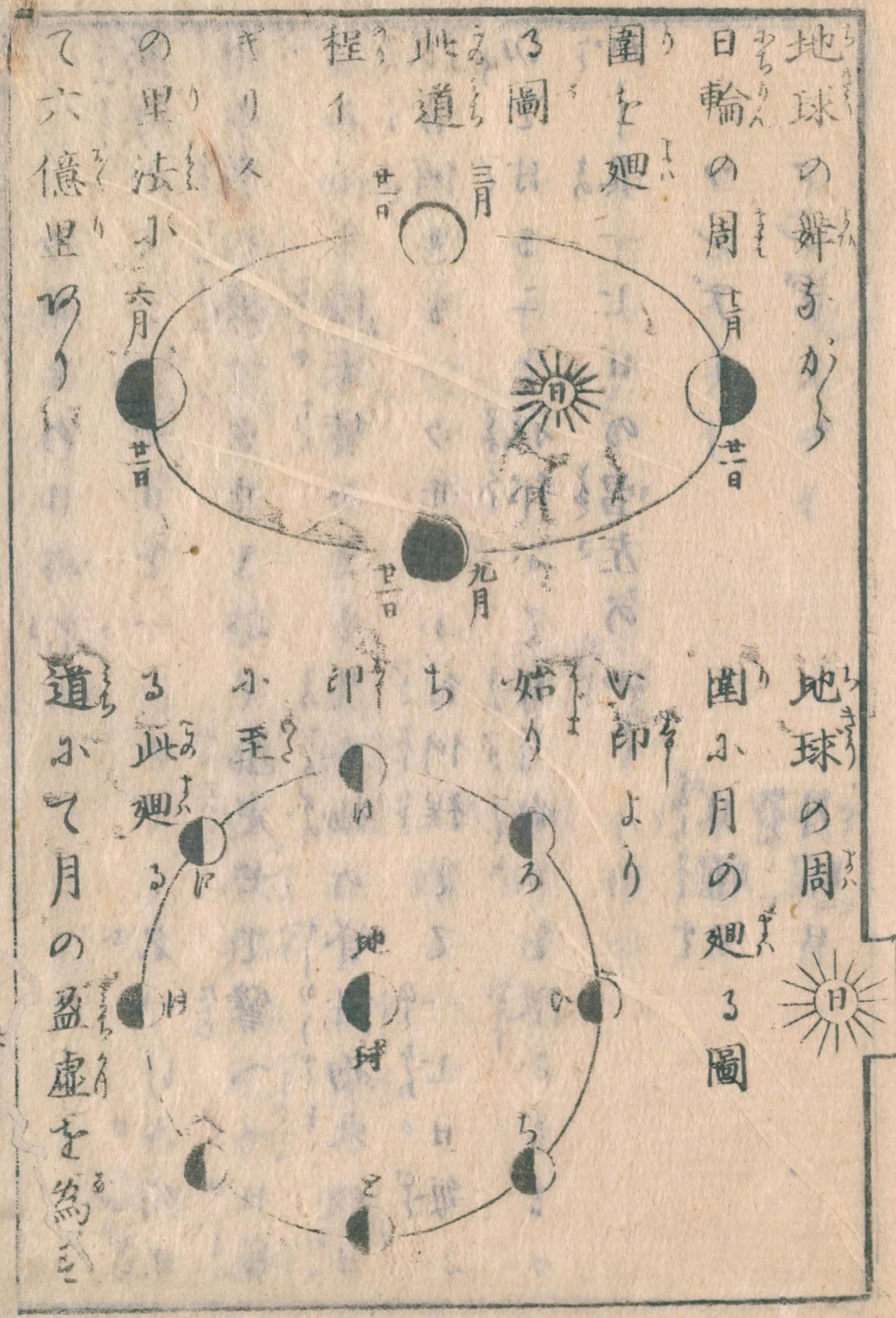


小葬礼の日を延して死人の腐敗をさるも
年と定めたる奉公人の給金八十二箇月の間
も十兩十三箇月の間も十兩をき一箇月ハ
たゞ奉公をさるるたゞ給金を拂ふ何れも一
方の損なり其外の不都合計る小違はるは是皆
大陰曆の正一かゞざる愚なり
右の次第小て此度大陰曆を改めて大陽曆と為
一俄小二十七日の差を起りたまども少しも怪
む小足らむ事実の損小もつとむ徳小もつとむ

千萬歳の後小至るより此の便利を増したる
都て人たる者ハ常小物事小心を留め世小新
らトき事の起ること何れも何故何れて斯る事
の出来一やとよく其本を詮索せざるべからむ
其本の由縁をさへ辨まらば何なる新奇ナク事
小ても怪む小足らむものなり此度の改曆小ても
其記を知らむして十二月の三日が正月の元日
小ふると計を以て夢中小こを聞き夢中小
これを傳へふバ実小驚くべき事なりと平坐



ようり人の讀むべき書物を讀む物事の道理を辨
 べよよく其本を尋ねば少くも不思議なる事小
 可多む故小日本國中の人民此改曆を怪む人ハ
 必も無學文盲の馬鹿者なり其を怪しまざる
 者ハ必も平生學問の心掛ける知者なりされバ
 此度の一条ハ日本國中の知者と馬鹿者とを區
 別する吟味の問題といふも可なり



西洋の如く定てハ一七日を一ウ井キと名づり其間日
 用の事大抵一ウ井キかて島定せし警へハ日産
 賃ふても借家賃ふても其外物の貸借約束の日
 限皆何きも一ウ井キ小付何程として一七日毎ふ
 切を付ること我邦かて毎月晦日を限ふる事
 如し其一七日の唱左の如し

ツレデイ
 マンデイ

日曜日
 月曜日



一年の月の名

チエウスデイ	火曜日
エンスデイ	水曜日
サアズデイ	木曜日
フライデイ	金曜日
サタデイ	土曜日

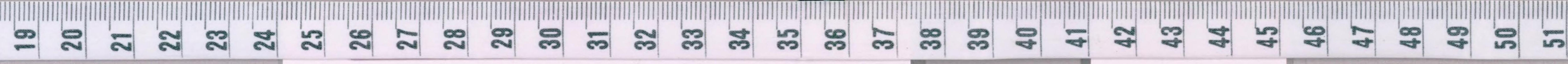
右の如く定てツンデイを休日かて高賣も勤も
 何事も休息をすることむりの我邦の元日の如

一年ハ十二小分チ十二箇月とモ其名トカノ後
 右の如く

月の名	日の數
ジャニユエリ	三十一日
ヘブリユエリ	二十八日
マアチ	三十一日
マデリ	三十一日
マモ	二十六日
マユ	三十一日

シユライ	七月	三十一日
アウグスト	八月	三十一日
ヒプテンバ	九月	三十日
ラクトラバ	十月	三十一日
ノベンバ	十一月	三十日
ダセンバ	十二月	三十一日

右の如く一三月四月五月を春と一六月七月八月を夏と一九月十月十一月を秋と一十二月一月二月を冬とモカク

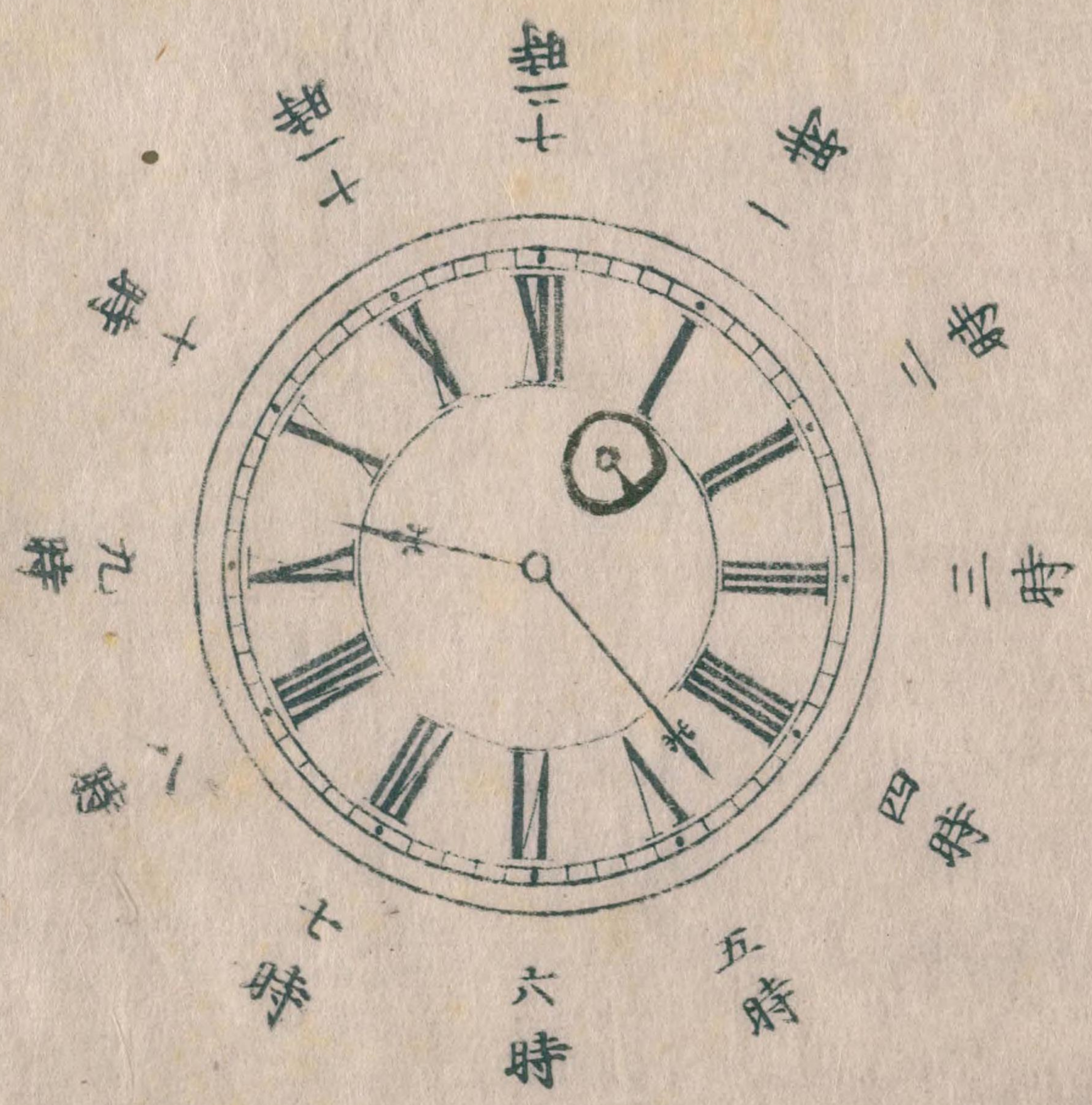


時計の見様

西洋にてハ一昼夜を二十四時トに分つ也其彼の
一時ハ日本の旧半時トなり其半時を六十トに分て
ふれを一ト分時ト(ミニウト)といふ亦この一分時を
六十トに分て一セカンドトと云ふ一セカンドハ大
抵脈の一動ト同ト扱時計の盤面を十二トに分ち
短針ハ一昼夜ハ二度トづ廻り長針ハ二十四度
づ廻る仕掛トせし先づ正午又ハ夜半十二時
を本トとしこの時ハ短針も長針も正しく重ト

合て十二時の所を指しこれより段々右の方
へ廻り短針の一時を指し又ハ長針ハ盤面を
一周して六十分時を過ぎ又十二時の處ト戻り
ハねより亦次第ト進み短針の一時と二時との
間ハ来るも又ハ長針も盤面を半ト廻りて三十
分時を過ぎ丁度六時の所ト来まり故ハ時計を
見て時を知ハ先づ短針の指し所を見て次ぎ
ハ長針の居所を見るべし譬へハ短針の指し所
九時と十時との間トハ長針の指し所二時の

時計の圖
時計



是れ九時過ぎ十分時ありと云ふことなり
 又此短針九時と十時との間を半過ぎて十時の
 方小近寄り長針も進んで八時の所来まこれ
 を十時前二十分時と云ふ即ち其二十分時とハ
 長針の十二時の所小至る迄二十分時ありと云
 ふことにて何れも長針ハ十二時を本小盤面
 小柄る六十の点を計へて何時何分時と云ふこ
 とを知るべし左小示を時計の圖ハ九時過ぎ二
 十分時の處なり



12749

晴
辰



国立国会図書館

タイトル『改暦辨』 請求記号 本別15-21

ガラス使用